

# 敦煌曲子詞訳注稿(二)

長谷部 剛  
橘 千早

## 5. 001 鳳歸雲 閨怨(一)(其二)

征夫數載、萍寄他邦。去便無消息、累換星霜。月下愁聽砧杵、  
擬(二)塞鴈行。孤眠鸞帳裏、枉勞魂夢、夜夜飛颺。  
思君薄行、更不思量。誰爲傳書與、表妾衷腸。倚牖無言垂血  
淚、闌祝三光。萬般無那處、一爐香盡、又更添香。

〔校勘〕

『敦煌歌辭總編』(総編)巻第一、0001。

『雲謠集雜曲子』第一詞調第一首。S.1441VおよびP.2838vを原  
卷とする。

(一) 閨怨 S.1441V、P.3808Vともに第一首「征夫數載」の前  
に「閨」の字があり、第二首「緑窗獨坐」の前に「又怨」の字が  
ある。任二北『敦煌曲校録』(校録)が「鳳歸雲」の題下に「閨  
怨」の二字を置き、『全唐五代詞』もこれに従う。

(二) 擬 『総編』は「月下愁聽砧杵起。塞雁南行」に作る。黄

征『敦煌歌辭總編』校釋商榷』は「擬」字を衍字と見なす。それ  
に対して、蔣禮鴻『敦煌曲子詞集』校議』(『敦煌變文字義通釋』  
所収、p.433)は「擬」は衍字ではなく「傳」あるいは「度」の  
意に解釈し、「月下愁聽砧杵擬、塞鴈行」と句読する。

〔韻字〕

邦(上平4江)・霜(下平10陽)・行(下平12庚)・颺(下平10  
陽)・量(下平10陽)・腸(下平10陽)・光(下平11唐)・香(下平  
10陽)。「思君薄行」の「薄行」は「薄幸(倖)」に同じと解釈し、  
この「行」は「幸・倖(去)」と見なして非押韻字とした。江韻と  
陽韻は、『中原音韻』では江陽韻に統合されるが、敦煌の他の俗作  
品群では基本的に区別されており、混用は極めて珍しい。

〔解題〕

「鳳歸雲」は『教坊記』「曲名」表に記載がある。

〔注〕

○萍寄 浮き草が水紋を残すように、あてどもなくさまようこと。唐・張喬「寄弟」に「故里行人戰後疏、青崖萍寄白雲居」。○月下愁聽砧杵 秋の月が輝くなか、砧の杵の音が聞こえてくる、という詩的情景は、「子夜四時歌」において形成された。「子夜四時歌・秋歌」其一「風清覺時涼、明月天色高。佳人理寒服、萬結砧杵勞」〔樂府詩集〕卷四十四「清商曲辭・吳聲」○孤眠 独り寝。〔青陽度〕其二「碧玉搗衣孤眠、七寶金蓮杵。高舉徐徐下。輕搗只爲汝。〔樂府詩集〕卷四十九「清商曲辭・西曲」○薄行（男性の）薄情、裏切り。唐・施肩吾「望夫詞二首」其一に「看看北雁又南飛、薄倖征夫久不歸」。○三光 仏教では「三光」を星、日、月の順に並べ日を中心にあるために尊いものと見なす（『總編』の説）。

〔通釈〕

出征した私の夫は何年も、浮き草のように他郷にさまよっている。家を出てからは手紙を送つてこないまま、幾星霜もたっている。月の光が照らすなか、私は憂える気持ちで、砧の杵でたたく音を聞き、（空には、夫のいる）とりで、から飛んでくる雁の列（を見る）。鸞の刺繍を施したとばりのなかで独り寝すれば、いたずらに魂は夢の中へとさまよい出、毎晩（あの人を求めて）飛び上がる。

あなたの薄情さを思えば、私のことなど全く思いもしないはず。私のために手紙をあなたに渡して、私の真心を伝えてくれる人など誰もいない。窓辺に寄り添い黙つたまま血涙が流れ、私は密かにお星様とお日様とお月様に祈る。すべてのことは私にはもうどうしようもない。香炉のお香が燃え尽きたので、また新しいお香を添える。

6. 又【002 鳳歸雲】 閨怨（一）（其二）

淅窗獨坐、修得爲（一）君書。征衣裁縫了、遠寄邊隅。想得（三）爲君貪苦戰、不憚崎嶇。終朝（四）沙磧裏、止憑三尺、勇戰好愚（五）。

豈知紅臉、淚滴如珠。枉把金釵卜、卦卦皆虛。魂夢天涯無暫歇、枕上長噓。待公卿迴故日、容顏憔悴、彼此何如。

〔校勘〕

『敦煌歌辭總編』（総編）卷第一、0002。

『雲謠集雜曲子』第一詞調第二首。S.1441VおよびP.2838vを原卷とする。

（一）又閨怨 S.1441V、P.3808Vともに第二首の冒頭に「又怨」とあるが、『總編』『全唐五代詞』は第一首「征夫數載」、第二首「淅窗獨坐」は副題として「閨怨」を持つと見なし、詞本文も「怨淅窗獨坐」としない。

(二) 爲 P.3808Vはこの「爲」字はない。衍字であろうか。

(三) 想得 『總編』は唐代西北音で「你」の声母<ɲ>と推定されることから「得」と同音と考え、「想你」に改めるが、ここでは取らない。

(四) 終朝 S.141V・P.3808Vともに「中朝」に作るが、「終朝」の意に解して文字も改めた。

(五) 奸愚 『總編』は文字自体を「單于」に改めるが、ここでは取らない。

〔韻字〕

書 (上平9魚)・隅 (上平10虞)・嘔 (上平10虞)・愚 (上平10虞)・珠 (上平10虞)・虛 (上平9魚)・嘘 (上平9魚)・如 (上平9魚)。なお、『廣韻』では、上平9魚と上平10虞は同用しない。

〔注〕

○ 淥窗 「淥窗」に同じ。「緑色の寒冷紗で覆った窓」あるいは「外の樹木の緑が映える窓」を意味すると考えられ、いずれにせよ女性の居室を指す。無名氏「一片子」に「淥窗桃李下、閒坐歎春芳」〔樂府詩集〕卷八十 近代曲辭二。○ 崎嶇 山道のけわしいさま。また、道がけわしくて行きなやむさま。雙聲語(「崎」「嶇」ともに溪母)。  
○ 把金釵卜 ①金釵で占卜する。②金釵を担保として占い師に占ってもらう。右の二説が考えられるが、ここでは①で解釈した。唐・范攄『雲溪友議』卷下「艷陽詞」は、妓女、劉采春の「望夫歌」(または「囉噴曲」)を収め、その歌辞には「莫

作商人婦、金釵當卜錢」(其三)、「眾中羞不明語、暗擲金釵卜遠人」(其六)とある。「金釵卜」については、鄭阿財《雲謡集・鳳歸雲》中「金釵卜」民俗初探》(《中国俗文化研究》2003年5月)が、この問題について論じており、金のかんざしを放擲して表か裏かによつて占いをする習俗が確かにあったことがわかる。  
○ (10) 待 「鳳歸雲」第二首は上闕(淥窗獨坐…)が四五四七四五四四の句型をとり、下闕(豈知紅臉…)が四四四四七四四四の句型をとる。上闕の「終朝沙磧裏」(五)と、下闕の「待公卿迴故日」(六)が対応するので、下闕の「待」は襯字として読まれていたかもしれない。○ 公卿 「丈夫」「官人」と同じく、女性が自分の夫を呼ぶときの呼称。ともに白話語彙。○ 迴故 「故」は「顧」に通じ「帰る、もどる」の意味がある(蔣禮鴻「敦煌曲子詞集」校議)の説)。

〔通釈〕

緑の窓辺に独り座り、あなた様への手紙をしたためる。戦地で着る服も裁縫が終わり、遙か遠く辺境の地へと送る。あなたは懸念に苦しい戦いを続け、険しい道も憚らず、一日中沙漠のなかで、ただ三尺の剣を頼りとし、邪悪で愚鈍な敵兵に戦いを挑んでおられることでしょう。

私がこのほお紅をつけた顔に、真珠のような涙を流しているのを、あなた様はどうして知りましょうか。いたずらに、金の

かんざしで占いをしてみるけれども、でる卦はすべて空しい。夢のなかで私の魂は天涯まですこしも休むことなく飛んで行き、枕の上では長くため息をつく。あなた様がお戻りになる日を待ち望むけれども、私の顔はげつそりとやせ、あれもこれもどうしたらいいのでしょうか。

### 7. 又【003 鳳歸雲】(其三)

幸因今日、得覩嬌娥。眉如初月、目引横波。素胸未消殘雪、透輕羅。□□□□□(一)、朱含碎玉、雲髻婆娑。

東鄰有女、相料實難過。羅衣掩袂、行步透迤。逢人問語羞無力、態嬌多。錦衣公子見、垂鞭立馬、腸斷知麼。

### 〔校勘〕

『敦煌歌辭總編』(総編)巻第一、0003。

『雲謠集雜曲子』第二詞調第三首。S.1441VおよびP.2838vを原巻とする。

(一)『總編』はここにあったはずの五字が脱落したものとみなす。『全唐五代詞』も『總編』に従う。

### 〔韻字〕

娥〔下平7歌〕、波〔下平8戈〕、羅〔歌〕、娑〔歌〕、過〔戈〕、迤〔集韻〕戈、多〔歌〕、麼〔上34果〕。麼〔上34果〕が、下平7歌と下平8戈とともに韻を踏んでいるのは、①平仄通押、②「麼」

が平聲に変化していた、の二つの可能性が考えられる。「南宋」『增修互注禮部韻略』では「麼」は下平聲七歌に属するので、おそらく「鳳歸雲」の時点ですでに平聲に変化していたのであろう。

### 〔注〕

○幸因「因」は「於」に同じ。○嬌娥 蛾(娥)眉を持った美しい女性。○横波 女性の流し目をするさまがまるで水が横に流れるようなので、このように言う。○素胸未消殘雪…白い胸には、人に踏まれて塵土で汚れた雪のような痕跡が残っている、と解釈できる。女性の胸を雪にたとえる用例は「雲謠集雜曲子」028「魚歌子」の「胸上雪」にも見られる。「敦煌曲子詞訳注稿」(一)参照。○碎玉 小さくて白い女性の歯。○婆娑 『毛詩・陳風・東門之枌』に「子仲之子、婆娑其下」とあり、毛傳は「婆娑、舞也」と言う。ここでは、女性の豊かな髻が優雅に揺れるさまを言う。○相料「撩撥」に同じ。「氣を引く」の意。それとは別に「料」を「はかる」の意にとると、「東鄰のむすめをあなたと比べれば」と解釈できる。○難過 つらい。苦しい。それとは別に「はるかに及ばない」とも解釈でき、「相料實難過」で「東鄰のむすめをあなたと比べれば、はるかに及ばない」となる。

### 〔通釈〕

幸いにも今日は、美しい女性を目にすることができた。彼女の眉は三日月のよう、流し目はさざ波のよう。白い胸には、人

に汚された痕がまだ消えず、うすぎぬを羽織っている。(…赤字部分…) 紅を引いた両唇からは白くて小さな歯がのぞき、豊かなもとどりは優雅に揺れる。

東の隣家にはむすめがいて、私の気を引くので私は本当につらい。うすぎぬのたもとで顔を覆い、おもむろにそぞろ歩く。道で人に会って問われても、恥ずかしがってなよなよして、嬌態が多い。錦を着た公子が彼女を見て、鞭を垂れて馬から下り、(彼女に恋い焦がれて) はらわたもちぎれんばかりであるのを(あなたは) 知っているのか？

## 8. 又【04 鳳歸雲】(其四)

兒家本是、累代簪纓。父兄皆是、佐國良臣。幼年生於閨閣、洞房深。訓習禮儀足、三從四德、針指分明。

娉得良人。爲國願長征。爭名定難、未有歸程。徒勞公子肝腸斷、謾生心。妾身如松柏、守志強過、魯女(二) 堅貞。

### 〔校勘〕

『敦煌歌辭總編』(総編) 卷第一、0004。

『雲謠集雜曲字』第二詞調第四首。S.1441V および P.2838v を原卷とする。

(一) 魯女 S.1441V および P.2838v は「曾父」に作るが、蔣禮鴻『敦煌曲子詞集』校議「は「魯女」に作るべきことを主張す

る。『總編』『全唐五代詞』もこの説に従う。以下の〔注〕「魯女」参照。

### 〔韻字〕

纓(下平14清)・臣(上平17眞)・深(上平21侵)・明(下平12庚)・人(上平17眞)・征(下平14清)・程(下平14清)・心(上平21侵)・貞(下平14清)。「纓」「明」「征」「程」「貞」の韻母/ㄓ/と、「臣」「人」の韻母/ㄓ/、「深」「心」の韻母/ㄓ/が通押されている。

### 〔注〕

○兒家 若い女性が自分の家を指して言うときの呼称。寒山詩に「兒家寢宿處、繡被滿銀床」あるいは「何須久相弄、兒家夫婦知」などがある。○良人 妻が夫を指して言うときの呼称。「古詩十九首」其十六(『文選』卷二十九、『玉臺新詠』卷二)に「夢想見容輝、良人惟古歡」。○魯女 『列女傳』節義傳に載せる「魯秋潔婦」、すなわち春秋・魯の秋胡子の妻を指す。秋胡子は新婚五日で仕官のため故郷を離れ五年度に帰郷することになった。その途中、桑摘みをしている女を誘惑しようとするが拒絶される。その女は実は秋胡子の妻であり、悲嘆した彼女は入水する。顔延之「秋胡詩」(『文選』卷二二)はこの貞女「秋胡妻」をうたう。

### 〔通釈〕

わたしの家はもともと代々高位高官の家で、父も兄もみな、

国を支える忠良な家臣です。私は幼くしてたかどのの奥深い部屋で育ちました。しつても手習いもしきたりもみな身についていて、三従の教えも四つの徳目も備わり、針仕事にも明るいです。

良き夫を婿に取りました。夫はお国ために自ら願って出征し、功名を競って国難を平定しようと、まだ帰ってきていません。若様はいたずらに私に恋い焦がれ、みだりに（ふしだらな）お気持ちを抱いておられます。わたくしの身は松柏のように変わらない貞節を夫に誓い、志を守って強固なことは、かの秋胡の妻の貞淑さを越えているでしょう。

#### 【付記】

本稿はJSPS科研費・基盤研究（B）「隋唐燕楽歌辞の文学的・音楽学的アプローチによる双方向的研究」（研究代表者：長谷部剛、15H03197）による成果である。

# Translations and notes of Dunhuang Quzici II

HASEBE Tsuyoshi and TACHIBANA Chihaya

*Yun yao ji* 雲謠集 is a collection of Dunhuang quzici 敦煌曲子詞, containing 30 poems. Dunhuang quzici 敦煌曲子詞 is undoubtedly a preceding form of Songci 宋詞, a research on it has not being actively pursued in the Japanese academic world. HASEBE, Tsuyoshi and TACHIBANA, Chihaya translated and annotated 4 poems in *Yun yao ji* 雲謠集 in cooperation. This is the first stage of study on Dunhuang quzici 敦煌曲子詞.

キーワード：雲謠集 (*Yun yao ji*), 敦煌曲子詞 (Dunhuang quzici), 宋詞 (Songci)

